

三毛ヶ池遺跡



1993

津山市教育委員会

序

三毛ヶ池遺跡は、津山市河辺に所在する弥生時代の墳墓であります。本遺跡の所在する河辺地域周辺は奈良時代に美作国ができますと、國分寺と國分尼寺とが建立された地域でもあり、古代から重要な地域として認識されていたと考えられます。今回調査した遺跡も、加茂川の水運を見渡せる丘陵上に立地しています。また、本遺跡のように弥生時代の中期につくられた墳墓は岡山県内でもあまり類例がなく、大変貴重な資料として今後の調査研究が期待されます。

また、調査には開発事業者である巴建設株式会社・代表取締役社長吉田俊英氏の積極的な御理解と御協力をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

なお、末筆ではございますが発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月31日

津山市教育委員会

教育長 藤原修己

例　　言

1. 本書は民間造成事業に伴う三毛ヶ池^{スリモカニシマ}遺跡の発掘調査報告書である。
1. 発掘調査にかかる経費は原因者である巴建設株式会社の負担によるものである。
1. 発掘調査は津山弥生の里文化財センター主事小郷利幸が担当し、平成4年6月29日から9月9日まで実施した。
1. 本書に使用したレベル高は海拔高、方位は磁北である。
1. 本書第2図に使用した「周辺遺跡分布図」は、建設省国土地理院発行5万分の1「津山東部」を複製したものである。
1. 本書の執筆、編集は、小郷が担当しておこなった。
1. 発掘調査・整理作業には、巴建設株式会社、津山市シルバー人材センター、文化財センター主任行田裕美、同主事平岡正宏、野上恭子、岩本えり子、家元博子、牧野博の協力を得た。
1. 出土遺物・図面等は、津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター（岡山県津山市沼600-1）で保管している。

目　　次

I 遺跡の立地と周辺の遺跡	1	III 調査の記録	6
1 遺跡の立地	1	1 三毛ヶ池1号上層墓	6
2 周辺の遺跡	1	2 三毛ヶ池1号下層墓	19
II 調査の経過	4	3 遺構に伴わない遺物	26
1 調査経過	4	IV まとめ	28
2 調査体制	4		

I 遺跡の立地と周辺の遺跡

1 遺跡の立地

三毛ヶ池遺跡は、岡山県津山市河辺6-2番地に所在する。中国山地と吉備高原との間の盆地に位置する津山市は、中心部を流れる吉井川流域沿いに市街地及び水田耕作地帯が開けている。本遺跡はその吉井川の支流、加茂川左岸の標高200m以下のなだらかな丘陵上に位置し、眼下には加茂川のせせらぎをさらに遠くは那岐山（標高1,240m）など中国山地の山並みを見渡すことができ、非常に眺望の良い所に立地している。本遺跡の南500mの所には遺跡名となつた三毛ヶ池が存在し、さらに南端を通っている林道は現在はほとんど往来は無いものの、戦後間もないころまでは主要幹線道として使用されていた。この道は、東は勝央町植月の集落から西は河辺（国分寺）、津山市街地とを結ぶ道として古来から使用されていた主要道の一つである。よって、本遺跡は加茂川の水路と山越えの陸路とを結ぶ交通の要衝に立地していると言える。また、本遺跡の標高は150~153m、平野部との比高差は約45mを測る。

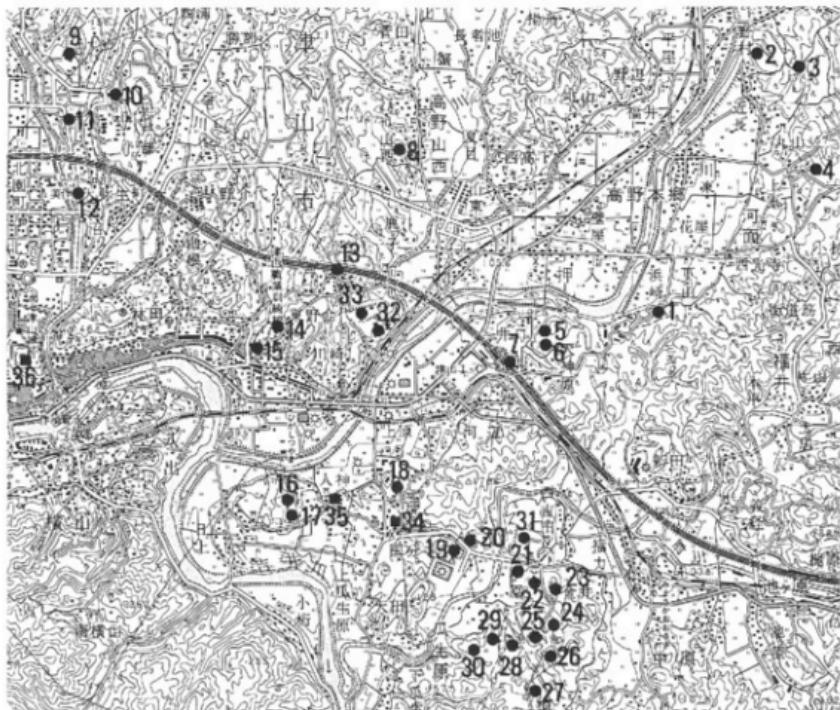
2 周辺の遺跡

本遺跡周辺特に加茂川左岸流域を中心に遺跡を概観してみる。縄文時代以前の遺跡はあまり知られていないが、天神原遺跡（註1）、崩レ塚遺跡（註2）でナイフ形石器の出土が知られ



第1図 三毛ヶ池1号墓近景（北から）

ている。縄文時代としては早期から前期の縄文土器と焼けた礎群の出土したクズレ塚古墳下層遺構（註3）がある。本遺跡を含め弥生時代の遺跡は最近の大規模開発に伴う発掘調査でかなり良好な調査例が増えてきている。天神原遺跡（註1）、西青田遺跡（註4）や中核工業団地造成に伴う発掘調査で検出した中期の一貫西遺跡（註5）、崩れ塚遺跡（註2）、別所谷遺跡（註6）、深田河内遺跡（註7）、後期の一貫東遺跡（註8）、小原遺跡（註9）、大畠遺跡（註10）などがある。また、古墳時代としては加茂川と吉井川との合流地点に美作最古の前方後円墳と考えられる日上天王山古墳（註11）、円墳約60基で構成される日上歓山古墳群（註12）、円墳10数基の長歓山北古墳群（註13）、鍛冶工具の出土した長歓山古墳群（註14）、前方後円墳1基と方墳1基、円墳2基からなる近長四ツ塚古墳群（註15）、直径20mの円墳と方墳の近長丸山古

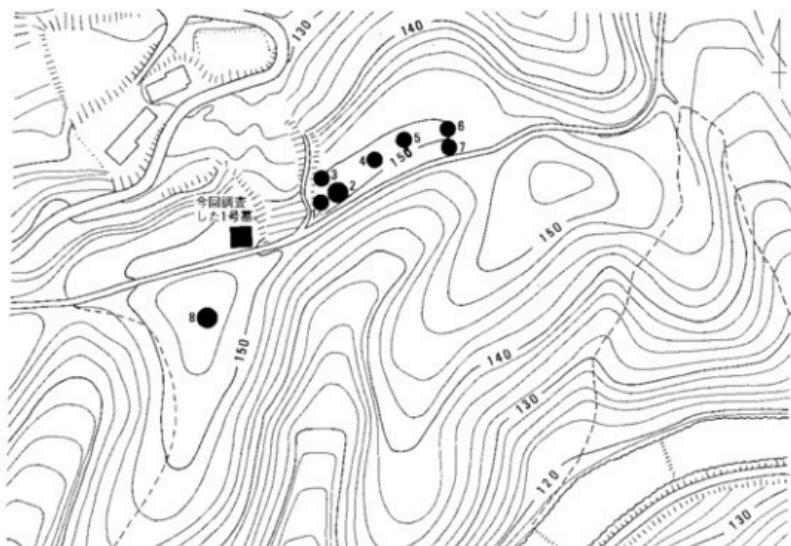


- | | | | | | |
|-------------|------------|-------------|-------------|------------|-------------|
| 1. 三毛ヶ池遺跡 | 7. 天神原遺跡 | 13. 押入西遺跡 | 19. 長歓山古墳群 | 25. 別所谷遺跡 | 31. 西青田遺跡 |
| 2. 近長四ツ塚古墳群 | 8. 正仙塚古墳 | 14. 六ツ塚古墳群 | 20. 長歓山北古墳群 | 26. 金井別所遺跡 | 32. 能満寺古墳群 |
| 3. オノ崎遺跡 | 9. 大田十二社遺跡 | 15. 玉串大塚古墳 | 21. 茶山古墳群 | 27. クズレ塚古墳 | 33. 狐塚遺跡 |
| 4. 近長丸山古墳群 | 10. 沼遺跡 | 16. 日上歓山古墳群 | 22. 一貫西遺跡 | 28. 柳谷古墳 | 34. 美作国分寺跡 |
| 5. 七ウ田古墳 | 11. 京免遺跡 | 17. 日上天王山古墳 | 23. 一貫東遺跡 | 29. 大畠遺跡 | 35. 美作国分尼寺跡 |
| 6. 井口率塚古墳 | 12. 竹ノ下遺跡 | 18. 飯塚古墳 | 24. 溪田河内遺跡 | 30. 小原遺跡 | 36. 津山城跡 |

第2図 周辺遺跡分布図 (S=1:50,000)

墳群（註16）、陶棺の出土したクズレ塚古墳（註3）、銀象嵌頭椎大刀把頭の出土した柳谷古墳（註17）、本遺跡と同一丘陵上の全長35m、帆立て貝式の井口車塚古墳（註18）、円墳の天神原古墳群（註1）などが存在し、本遺跡内でも直径10mほどの円墳数基が確認されている。古代になると本地域には美作国分寺（註19）、国分尼寺（註20）が建立され古代以降栄えてきた。今回調査の1号墓も本来は三毛ヶ池古墳群中の一古墳と考えられていた。今回の調査で弥生時代の墳墓と判明したため、三毛ヶ池1号墓と呼称する事とした。また、今回の分布調査で見つかった古墳8基は、便宜的に番号をつけている（第3図）。

- （註1）河本清他「大神原遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7」岡山県教育委員会 1975
- （註2）保田義治他「崩れ塚道路」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第28集」津市教育委員会 1989
- （註3）小郷利幸他「崩れ塚古墳群・クズレ塚古墳」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第31集」津市教育委員会 1990
- （註4）行田裕美「西吉田遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第17集」津市教育委員会 1985
- （註5）行田裕美「一貫西遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第33集」津市教育委員会 1990
- （註6）1986年に津市教育委員会が発掘調査、報告書作成中
- （註7）保田義治他「深田河内遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第26集」津市教育委員会 1988
- （註8）渕哲夫「一貫東遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第43集」津市教育委員会 1992
- （註9）木村祐子他「小原遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第38集」津市教育委員会 1991
- （註10）行田裕美他「大須遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第47集」津市教育委員会 1993
- （註11）『圓錐・津市の史跡』津市教育委員会 1978
- （註12）「六ツ塚古墳群」「日上城山古墳群」「津市文化財調査報4」津市教育委員会
- （註13）行田裕美他「長嶽山北古墳群」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第45集」津市教育委員会 1992
- （註14）今井亮「原始社会から古代国家の成立へ」「津市史 第1巻 原始・古代」津市史編さん委員会 1972
- （註15）「近長四ツ塚古墳」「津市の文化財」津市教育委員会 1983
- （註16）小郷利幸「近長丸山古墳群」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第41集」津市教育委員会 1992
- （註17）保田義治他「谷谷古墳」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第24集」津市教育委員会 1988
- （註18）「井口車塚古墳」「津市の文化財」津市教育委員会 1980
- （註19）委習大他「美作国分寺跡発掘調査報告」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第12集」津市教育委員会 1983
- （註20）委習夫「美作国分尼寺跡発掘調査報告」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第12集」津市教育委員会 1983



第3図 三毛ヶ池遺跡・古墳群分布図 ($S=1:2,500$)

II 調査の経過

1 調査経過

平成4年6月18日、津山市教育委員会職員が三毛ヶ池古墳群（津山市遺跡地図No.91）の一部が土取り工事で破壊されているのを発見した。現地確認の結果、古墳の一部が破壊されている可能性が考えられるため、工事者の巴建設株式会社に連絡、古墳所在部分周辺の土取り工事を中止することを要請した。6月23日、この古墳等の取り扱いについて津山市教育委員会と巴建設株式会社取締役社長 吉田俊英氏とが協議を行い、その結果津山市教育委員会が現状把握のための確認調査を実施し、それに基づき必要部分については企画調査を実施する事で同意した。同時に同氏から埋蔵文化財の一部を破壊してしまった事に関する額定書と文化財保護法第57条の2に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が、さらに7月1日付けで同法第98条の2に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知」を津山市教育委員会教育長名で文化庁長官宛に提出した。本調査にあたっては、7月10日付けで「開発事業実施に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」を同氏と締結し、本調査を実施した。本調査は7月13日から実施し、その結果当初古墳と考えていたが、弥生時代の墳墓である事が判明し、三毛ヶ池1号墓と呼称する事とした。さらに盛土の下から土壙墓群が検出され、上下に2時期の墳墓が存在する事が判明した。全景の航空写真や測量など全調査が終了したのは、9月9日である。その後、遺物整理、報告書の作成を行った。なお調査対象面積は約 250m²である。

2 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記のとおりである。

発掘調査主体 津山市教育委員会 教育長 森 定 貞 雄 (H4. 9. 30)

藤原修己 (H4. 10. 1 ~)

教育次長 長瀬 康 春

文化課長 森 元 弘 之

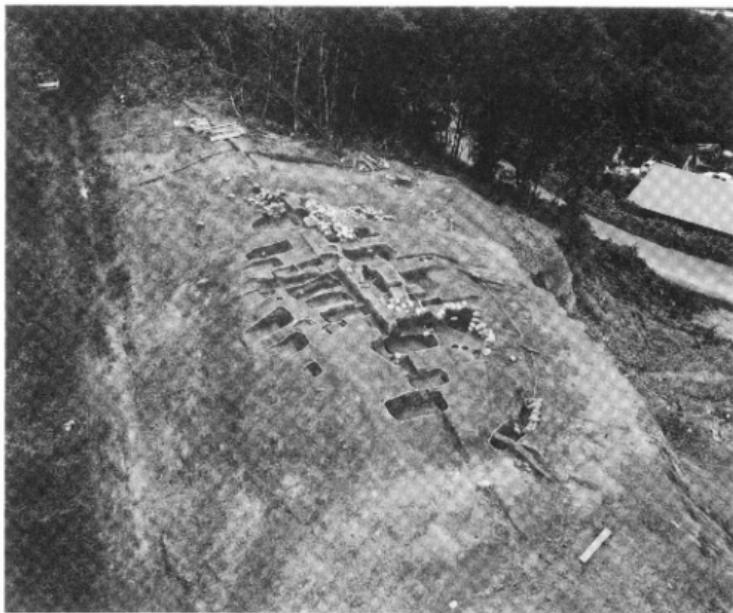
文化財センター 所長 須江 尚 志

次長 中山 俊 紀

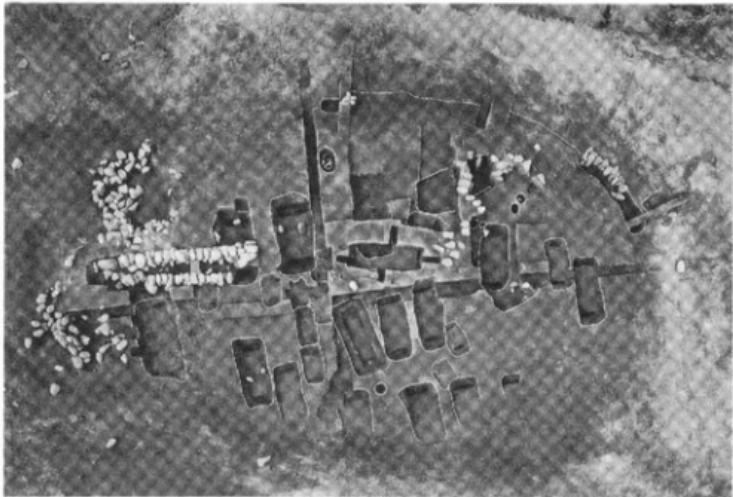
主事 小郷 利 幸 (調査担当)

尚、発掘調査には、巴建設株式会社、津山市シルバー人材センターの作業員の方々に御世話をになり、また発掘調査から報告書作成に至るまで下記の方々からも御指導、御協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。(敬称略)

小笠原好彦、梶岡辰男、小谷善守、古市秀治



第4図 三毛ヶ池1号墓全景（東から）



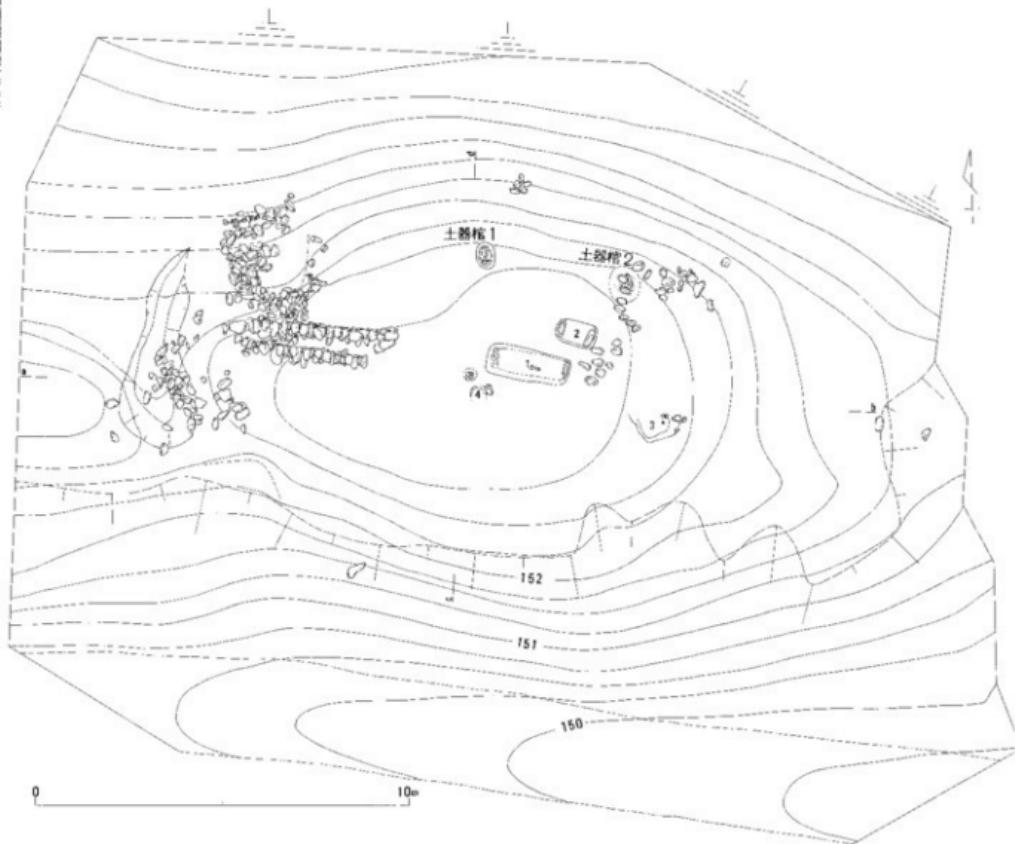
第5図 三毛ヶ池1号墓全景

III 調査の記録

今回検出したのは弥生時代の墳墓1基（三毛ヶ池1号墓）ではあるが、同一場所に上下で2時期の墓域を形成している。そのため、両者を上層（三毛ヶ池1号上層墓）、下層（三毛ヶ池1号下層墓）とに分けて、以下概略を述べる事とする。

1. 三毛ヶ池1号上層墓

(1) 調査前の状況

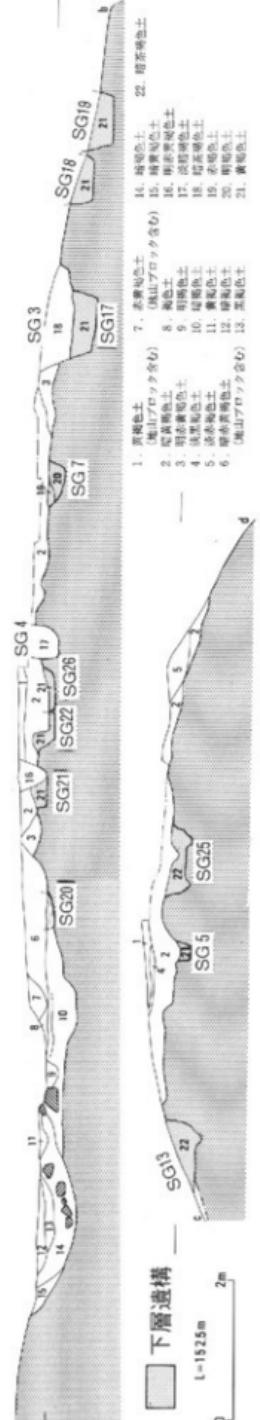


第6図 三毛ヶ池1号上層墓全体図 ($S = 1:150$)

本墳墓調査時には、すでに北側及び墳丘の一部が重機によって削平されていた。重機の運転手によると頂部には少し高まりがあり、その部分約60cm程を削平し西側谷部を埋めたとの事であった。さらにその際、南側に河原石による東西方向の2列の石列があったとの証言があるが、今回の調査時にはそのような石列は痕跡すら残っていなかった。周辺部にはかなりの河原石が散在していた事から、上記の状況を伺い知る事もできる。

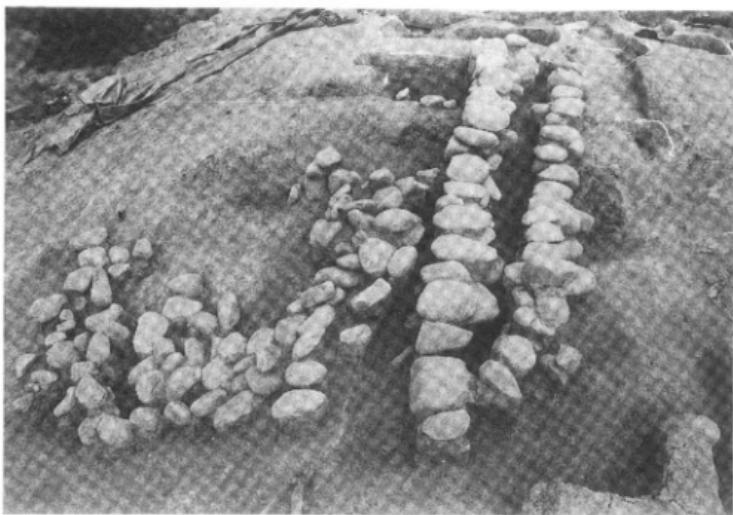
(2) 墳丘（第6図）

墳丘は西側の丘陵切斷による周溝と盛土、その上に貼られた貼り石などによって整形されている。周溝は、丘陵鞍部北側を長さ5.3m、最大幅2.1m、深さ0.55m、L字形に掘り、南側には一部堀り残しの部分が幅50cm程存在し、この部分は陸橋のようになっている。かなりの削平を受け正確な墳形・規模は明確ではないが、墳形は梢円ないしは隅丸に近い長方形（推定長さ12×10m）の西側にやや不整形の突出部（長さ4m、幅4m）が付設し、全長は約16m、高さは残存部分で1.5mを測る。この突出部が付設するくびれ部北側コーナーには、河原石を3~4段に貼っている。残存するのは突出部側2mほどで、基底面からはやや浮いた状態でやや乱雑に貼っている（第8図）。さらにこの貼り石から北側斜面に沿ってL字形に石が置かれている。これについては転落石の可能性は少なく、何らかの遺構ではあるものの、中央部分に石が見られない事からその性格について明確ではない。この中央部分の石はすでに転落していると考え、本来はこのくびれ部斜面から基底面までは全面に石が貼られていた可能性も考えられる。南側のくびれ部は地山整形の削り出しで同様にコーナーをつくり出している。ただこの部分については林道によってかなり削平されているため、貼り石の存在については不明であるものの、石がほとんどみられない事から、貼られていなかつた可能性が大きい。また、周溝内でもかなりの石が検出されている。これらはほとんどが浮いた状態の転落石である。





第8図 突出部石列・貼石出土状況平・断・立面図 (S=1:60)



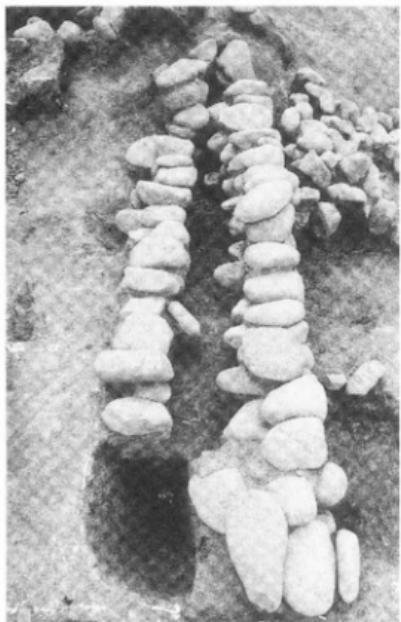
第9図 突出部石列・貼石状況（西から）



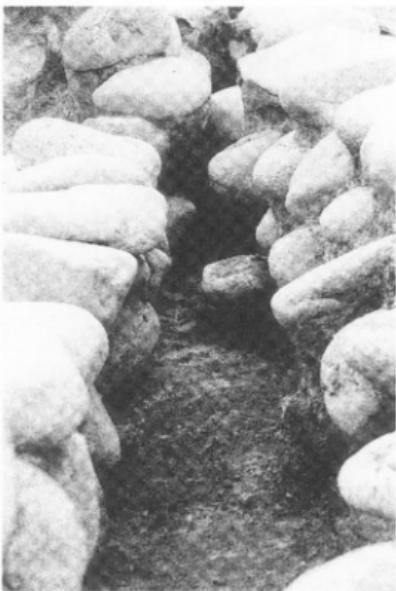
第10図 突出部貼石状況（北東から）



第11図 北側くびれ部貼石状況（北から）



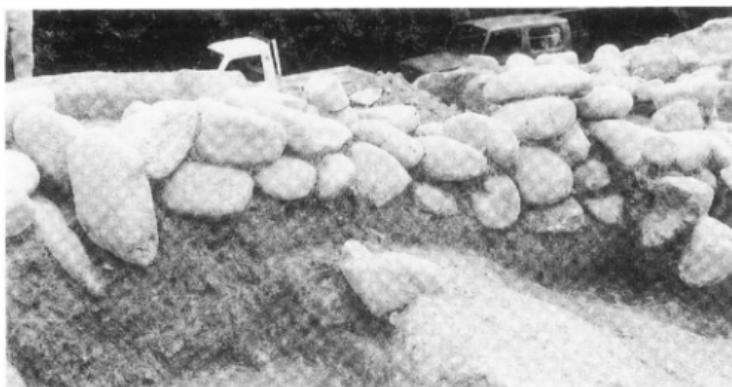
第12図 石列状況（東から）



第13図 石列内部状況（東から）



第14図 石列内土層状況（西から）



第15図 石列の積み方（北より）

そのため、くびれ部同様西側斜面にも本来は石が貼られていた可能性が考えられる。その他のくびれ部上の石は盛土内に含まれているものであり、突出部構築時に埋められたものの可能性が大きい。また、北東側斜面にも部分的ではあるが貼り石の一部と考えられる石が検出されている。その事から少なくとも、北側斜面には何らかの形で貼り石が存在していたものと推測される。盛土は、北東側が比較的良好に残存し最大で50cmを測る。検出したのは3層（第7図1～3など）で、斜面部分は特に地山ブロックを含む土で堅くしめられている。また、北側くびれ部付近に接して検出した東西方向の2列の石列（第8図）は、盛土内に積まれているため墳

丘完成時には表面にでていなかったと考えられる。よって、これら石列は墳丘構築にあたり盛土内に積まれたものと考えられる。この石列は当初埋葬施設の豊穴式石槨と考えていたが、小口部分が明確でなく、床面が傾斜をもち、掘り方が存在しない事、埋土は互層で堅く埋められている事、副葬品も皆無である事などから埋葬施設ではなく、先の墳丘構築時の一技法と解した方が良いと思われる。いずれにせよこの時代ではあまり類例は知られていない遺構ではある。北側石列は全長4.7m、北側の面がそろっており、旧表上面に沿って石を積み、高い所は2段、低い所は3~4段に積んでいる。南側石列は全長3.6m、北側の面がそろっている。石の積み方は北側と同様で隙間は盛土で充填している。両者とも斜面に沿って傾斜しているものの、最高所のレベルはお互いそろっている。尚、この部分の下層には下層墓の周溝がかなり大規模に存在している事から、この部分を埋める際の補強にこの石列を使用したものと考えられる。

(3) 埋葬施設・出土遺物

埋葬施設として検出したのは、土壙墓4基と土器棺2基だけである。墳丘が削平を受けている事から、その他の埋葬施設が存在していた可能性がある。また、調査前の状況で述べた様に、重機による削平時に発見された2列の石列が、埋葬施設の可能性も考えられるが、今回の調査ではその痕跡すら検出していかない。そのため前述の盛土の補強のために内部に埋められた石の可能性もある。

土壙墓1（第16・17図）

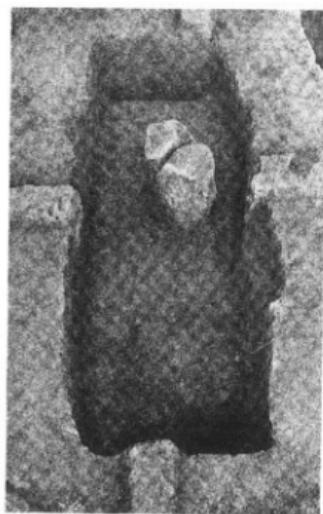
墓域の中心からやや北より、尾根線に対し平行に位置する土壙墓で盛土を切って作られている。墓壙上中央に墓標と考えられる石が2個置かれている。両小口溝をもち内部からの副葬品は皆無である。ただ、西側40cm程離れた所から弥生土器の底部（第19図1）が単独で出土している。これに関しては、この土壙墓1ないしは土壙墓4に供獻されていた場合も考えられる。土壙墓1の数値の詳細は、表1を参照されたい。

土壙墓2~4

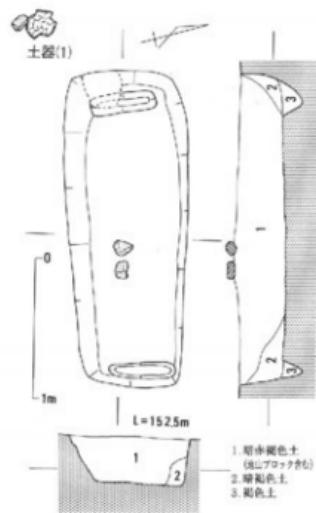
土壙墓2は、土壙墓1の北西に平行して存在する小規模な土壙墓で、両小口溝をもつ。埋土から弥生土器・甕（第19図2）が出土した。土壙墓3は、大部分が削平を受けていたため全容は不明である。小口溝も無く、内部から土器片、炭、小さ目の石数個が東側からまとまって出土している。土壙墓4は、大部分が確認調査時のトレンチ内にある。そのため全容は明確でない。出土遺物も皆無であるため、土壙墓でない可能性もある。各土壙墓の詳細な数値に関しては、表1を参照されたい。

土器棺1（第20~23図）

中央から北より斜面に位置し盛土を切って作られている。長径70cm、短径50cmの梢円形掘り方に、弥生土器・甕を横にして埋め、蓋は検出されていないので木などを使用していたものと



第16図 土塙墓1（西から）



第17図 土塙墓1 平・断面図 (S=1:40)

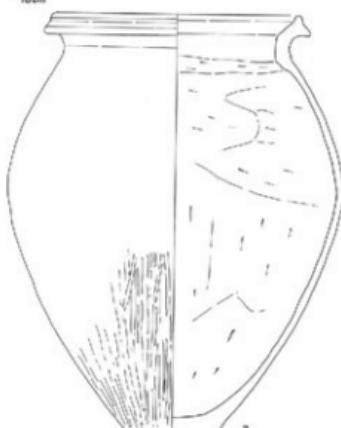
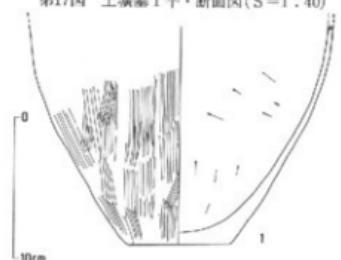


19-2

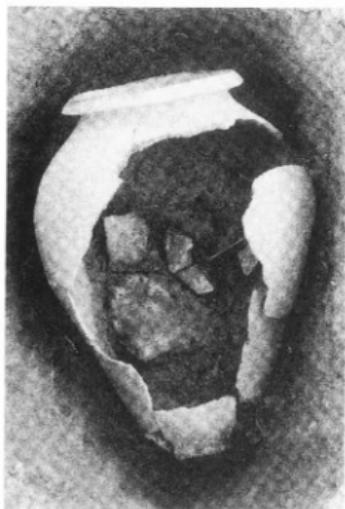


28-25

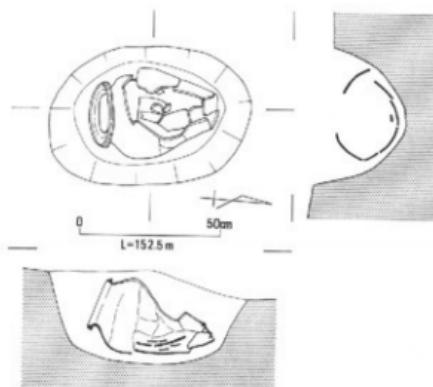
第18図 出土遺物



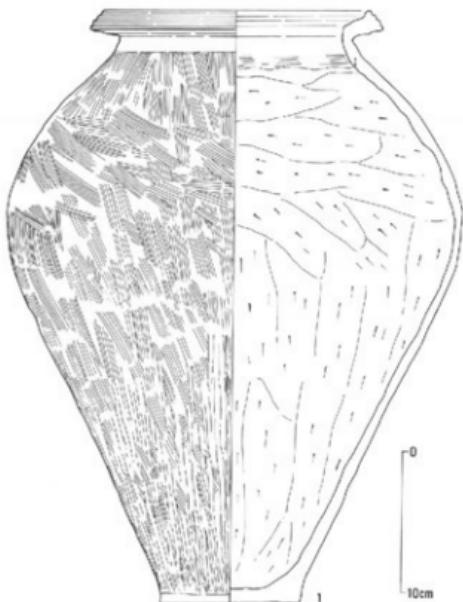
第19図 出土遺物 (S=1:4)



第20図 土器棺1 挿出状況



第21図 土器棺1 平・断面図 ($S=1:20$)



第22図 土器棺1 出土遺物 ($S=1:4$)

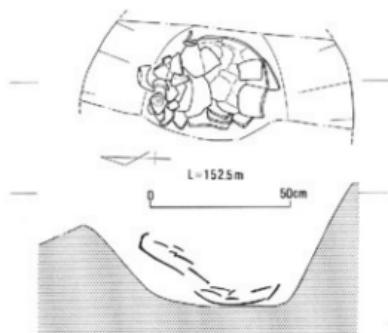


第23図 土器棺1 出土遺物

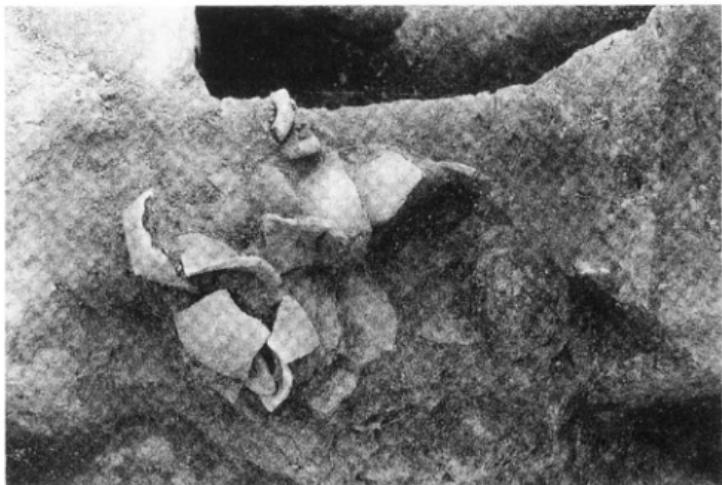
推測される。内部からは何も出土していない。甕（第22図1）は、口径19cm、器高42cmを測り、口縁端部はやや上方に肥厚させ端面に凹線文を施している。胴部外面には全面にハケを、下半にはその上からヘラ磨きを施し、内面は全面にヘラ削りを施している。

土器棺2（第24～27図）

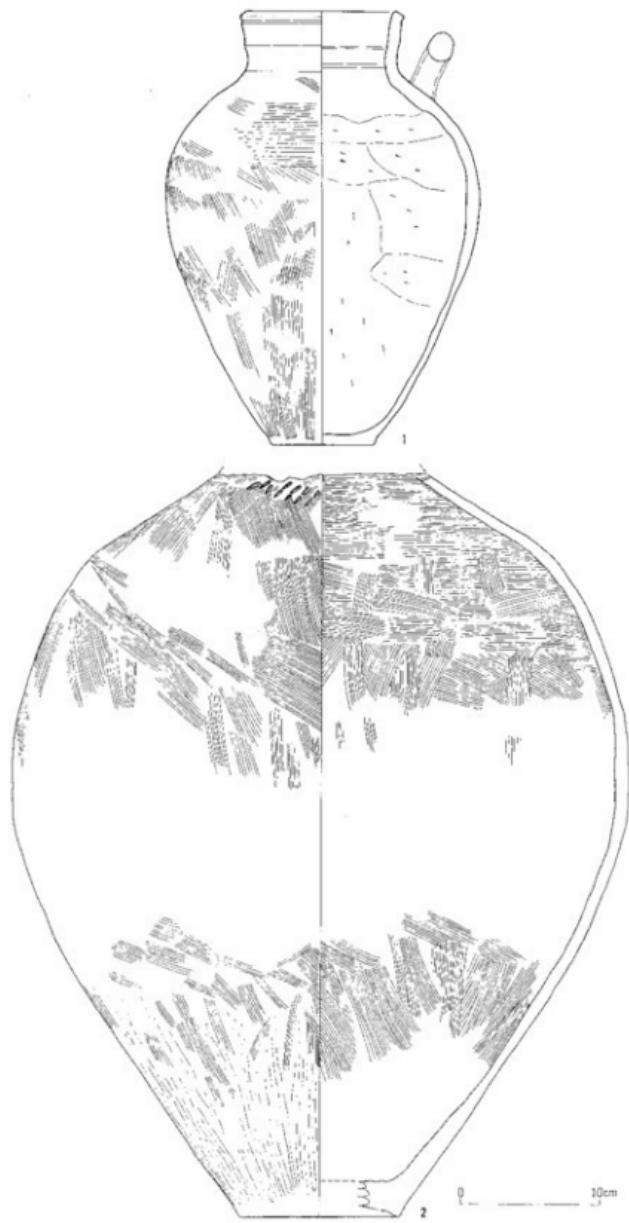
土器棺1の東側に位置する。盛土を除去し下層遺構の検出時に発見したため、全容は明確でない。盛土を切って作られ、おそらく直径1m程の円形掘り方内に弥生土器・甕ないしは壺の口縁部を打ち欠いた胴部（第26図2）を横にして埋め、把手付きの水差形土器（同1）を横し



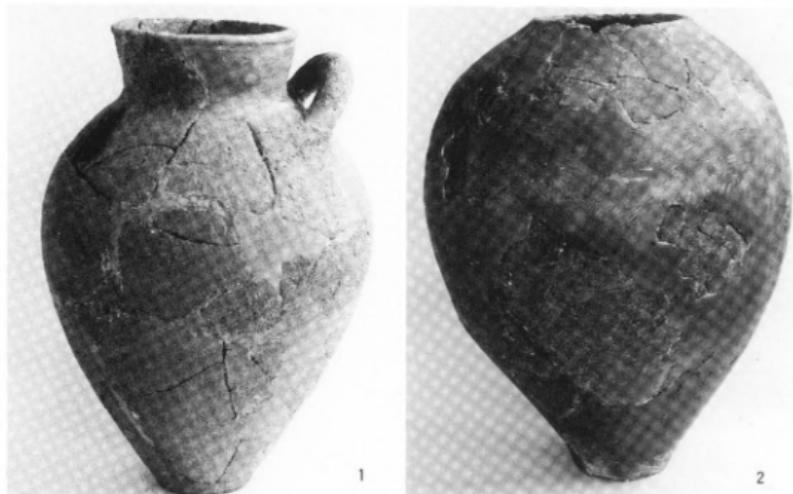
第24図 土器棺2 平・断面図 ($S=1:20$)



第25図 土器棺2 検出状況



第26図 土器楕2出土遺物 ($S = 1 : 4$)

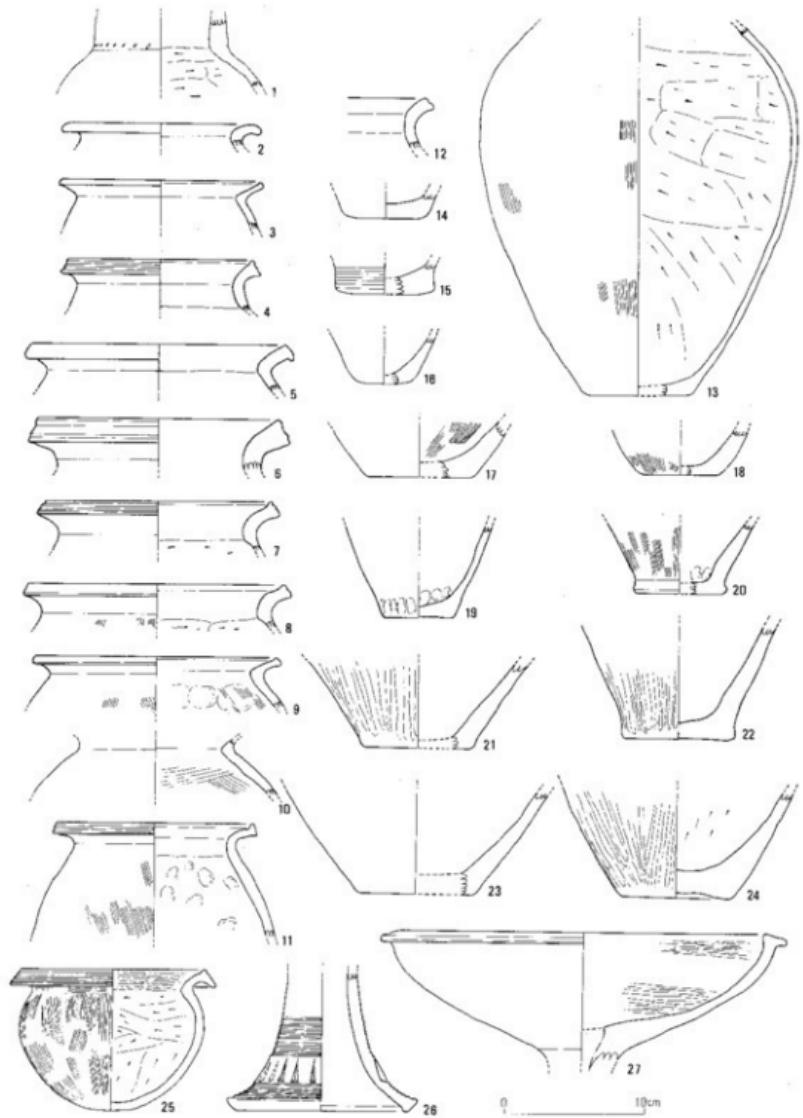


第27図 土器棺2出土遺物

その破片で蓋をしている。1は片側に把手が付く水差形土器である。口径11cm、器高31cm、胴部外面にはハケを内面にはほぼ全面にヘラ削りを施している。2は残存高52cmを測るかなり大きめの土器の胴部である。胴部外面の頸部付近に刺突烈点文が巡り、その他はほぼ全面にハケを施し下半部分にはその上からヘラ磨きを施している。また、内面は一部剥離のため明瞭ではないがほぼ全面にハケを施しているものと考えられる。出土遺物は皆無である。

その他、突出部の貼り石部分の石間からかなりの土器片が出土している（第28図）。かなりの破片があるものの完形に復元できるものは少ない。1は壺、2~13は壺、14~24は壺ないしは甕の底部、25は鉢、26・27は高杯形土器である。1の壺の頸部には列点文が巡り、壺は「く」の字に外反し端部を上方に少しつまみ上げるもの（3・9）、上方に肥厚させ端面に凹線文を施すもの（4・6・7・11）などがある。13は口縁部を欠損する胴部で外面にハケ、内面にヘラ削りを施している。25はほぼ完形に復元できる鉢で、口縁端部を下方に肥厚させ端面に凹線文を施し胴部外面にハケ、内面にヘラ削りを施している。27は椀状の高杯の杯部で、口縁端部は下方に肥厚させている。このタイプの高杯は26のような脚部がつくものである。

以上、ほとんどが後期の遺物であるが、中には中期の遺物（9・10・26・27など）が若干量みられ、これらは下層遺構からの流入遺物と考えられる。



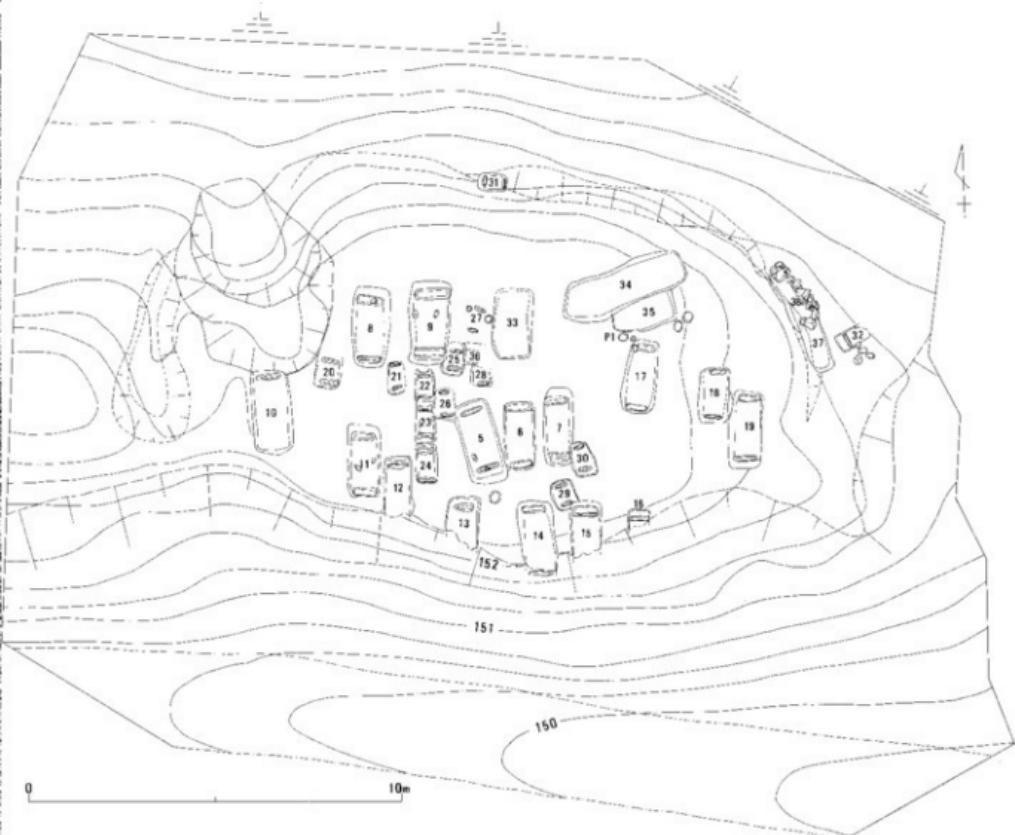
第28図 石列・斯石部分出土遺物 ($S=1:4$)

2. 三毛ヶ池1号下層墓

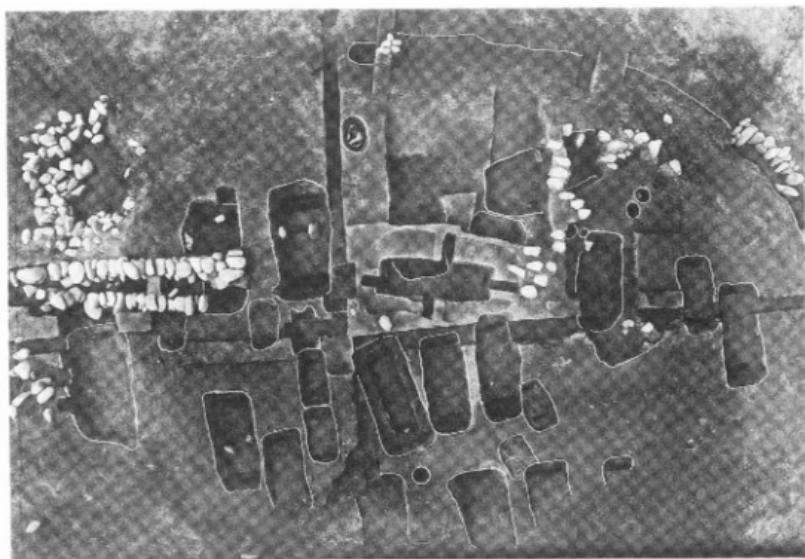
(1) 墳丘

上層墓同様南側は大きく削平を受けている。北側は地山を削り出して墓域を造り出し、東側では削り残しの部分が存在する。また、西側は幅5m程の広い溝によって丘陵を切断しているものの、東側同様削り残しの部分が存在する。そのため形状は明確ではないが東西15m、南北12m程の梢円形ないしは隅丸長方形状を呈しているものと推定される。高さは約1mで盛土はほとんど存在しない。

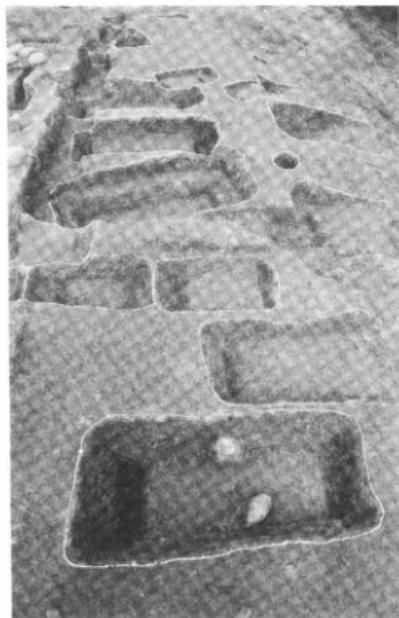
(2) 埋葬施設・出土遺物



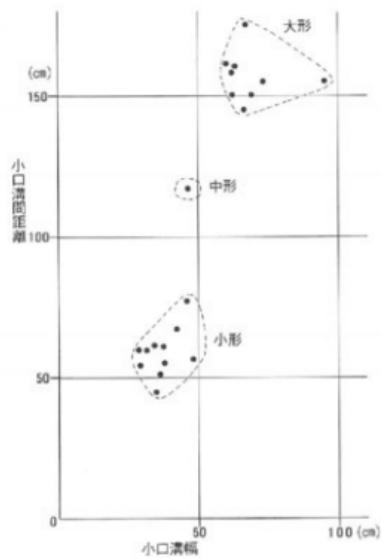
第29図 三毛ヶ池1号下層墓全体図 (S=1:150)



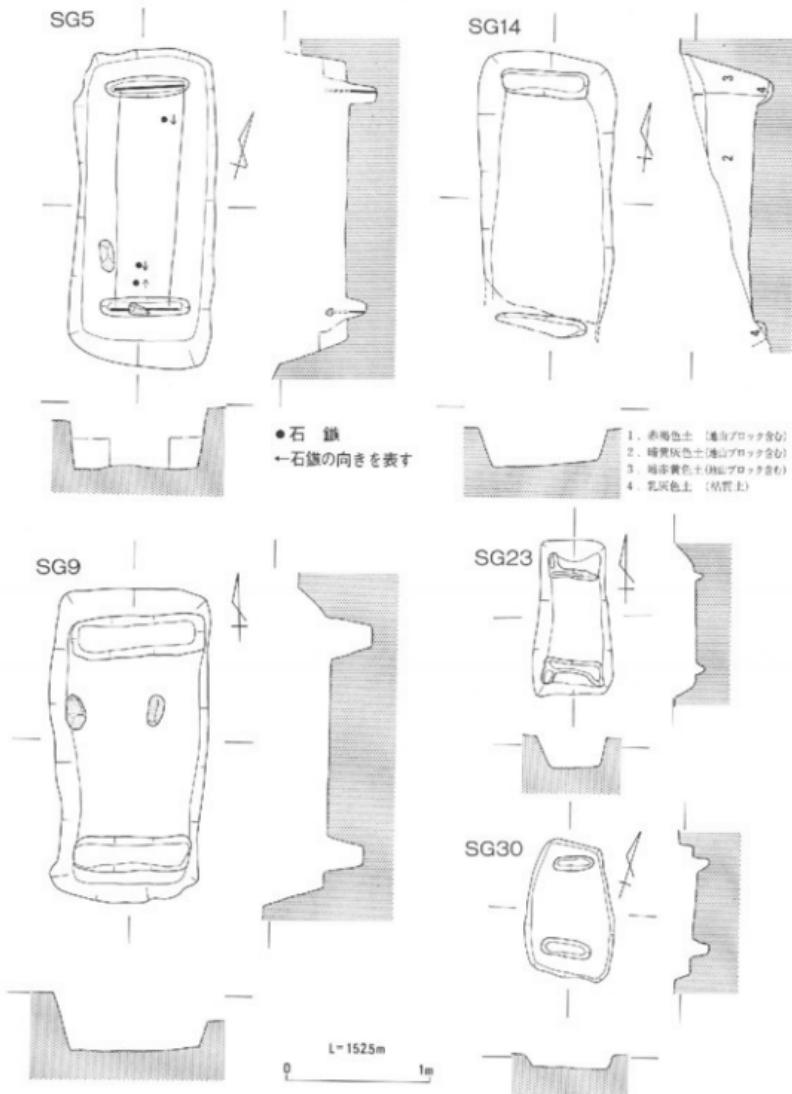
第30図 下層基全景（一部上層基と重複している）



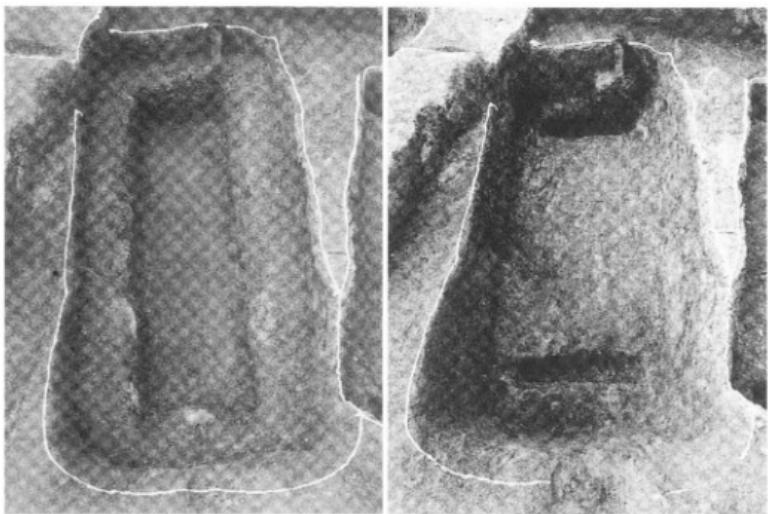
第31図 下層基上埴基群（西から）



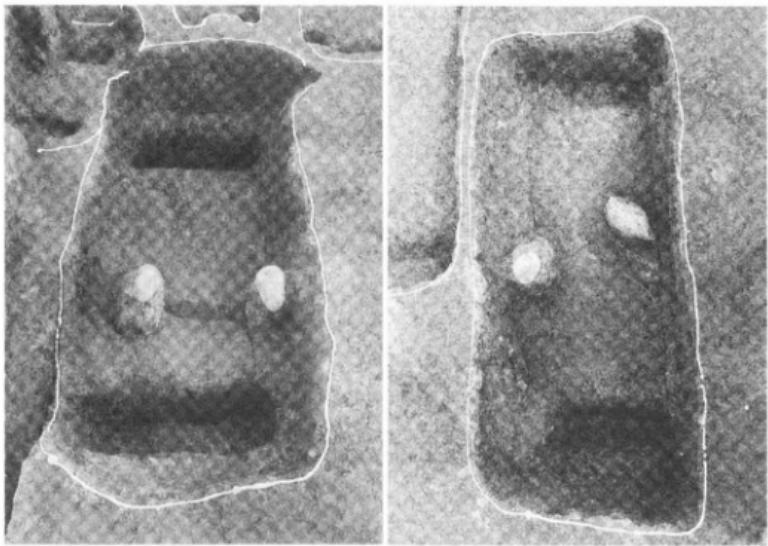
第32図 推定木棺法量図



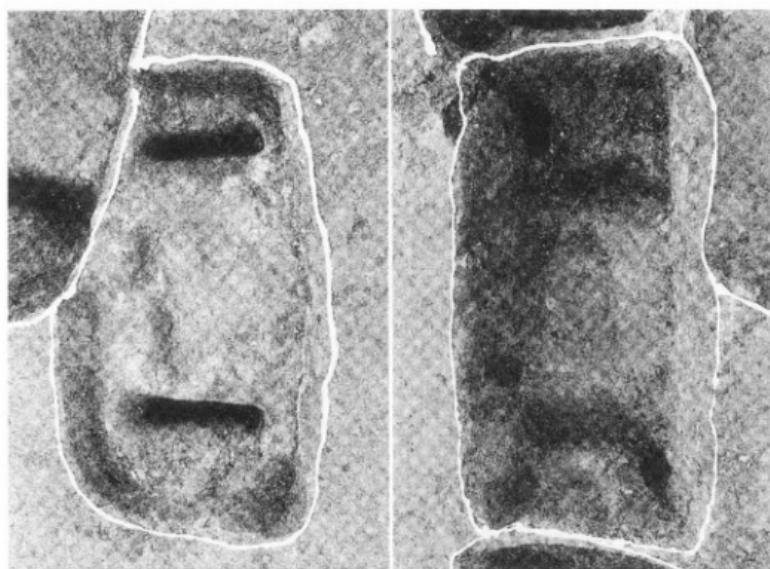
第33図 土墳墓 5・9・14・23・30平・断面図 ($S=1:40$)



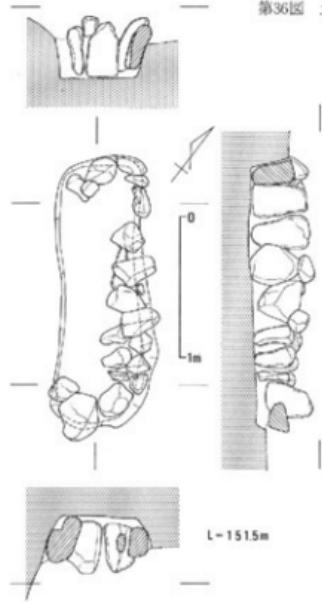
第34図 土塚墓 5 検出状況(左)、全掘状況(右)



第35図 土塚墓 9(左)、土塚墓 11(右)



第36図 土塚墓30(左)、土塚墓23(右)



第37図 土塚墓38平・断面図 ($S=1:40$)



第38図 土塚墓38 (北西から)

土壙墓はいずれも地山を掘り込んでつくられている。墳丘上に29基、墳端部分に4基、墳丘外に1基の計34基を検出している。この内、小口溝をもつもの（28基）ともたないもの（5基）、三方に石を立てているもの（1基）の三者に分類できる。また、墳丘内の小口溝をもつものはほとんど南北方向（尾根線に対し直交）を向き、小口溝から推定した木棺の規模もだいたい大形（長さ145～175cm、幅60～95cm）、中形（長さ117cm、幅46cm前後）、小形（長さ45～77cm、幅29～48cm）の3種類に分類できる（第32図）。さらに土壙墓5では木棺部分が粘土質となつて残っておりその構造を推測する事ができる。この場合は両側板が小口板に挟まれた形状「」である（第33図SG5）。これとは別に両小口板が側板に挟まれた形状「」と推定できるものもある（第33図SG23など）。小口溝をもたないものの内、土壙墓34・35は主軸が他とは大きく異なり、埋土も他とは違う炭を含む緻密な土で堅く埋められていた。そのため、小口溝をもつものとは性格が異なるもの可能性も考えられる。墳縁にあるのは、ある程度墳形に沿って作られているが、東西と北方向に1～2基程度である。この内で唯一土壙墓38だけが三方に河原石を立てている（第37図）。蓋石は存在せず内部から少量の土器片が出土した。各土壙墓の詳細については表1を参照されたい。いずれの土壙墓も副葬品はほとんど皆無であるが、土壙墓5から石鏡4点（第40図13・14）、土壙墓36から1点（同15）出土している。特

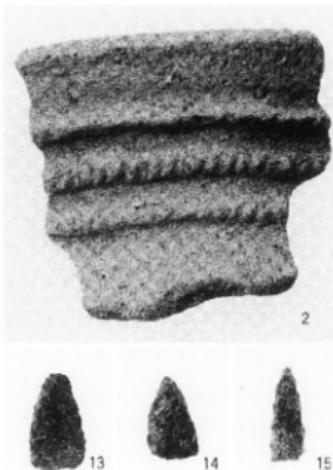
（単位：cm）

番号	墓 墓 上 横		墓 墓 底		小 口 溝 (北)		小 口 溝 (南)		小 口 規 定		尾 棚 板 と の 関 係	實 考	
	長さ	幅	深さ	幅	幅	長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ		
1	242	84	26	209	60	(52)	15	9	46	12	9	192	平 行 十字片
2	114	(45)	23	99	(53)	40	16	15	45	19	13	80	平 行
3	(130)	(80)	28	(76)	(68)								小口無し、土器片、炭
4	(26)	42	16	(21)	33								直 交
5	225	95	46	201	85	60	14	19	62	13	16	158	やや斜交 石鏡4、土器片
6	(179)	85	26	(175)	74	69	23	16	61	21	13	159	直 交
7	202	81	39	178	63	66	29	17	53	18	13	145	*
8	214	103	45	179	75	73	24	18	66	19	13	155	*
9	225	109	43	179	84	95	30	28	82	24	25	156	*
10	(225)	105	25	213	87	85	15	8				*	*
11	187	87	35	168	72	61	20	16	62	21	15	160	*
12	(162)	74	23	(150)	63	58	18	8				*	*
13	(146)	98	15	(135)	82	53	21	9				*	*
14	(201)	92	29	(189)	76	62	17	14	67	(15)	11	175	南北小口斜交平
15	(150)	82	10	(126)	73	69	27	15				*	*
16	(52)	(59)	18	(47)	(53)	(56)	12	15				*	*
17	198	58	30	178	73	53	19	12	60	15	18	161	十脚片
18	145	82	36	129	60	43	12	18	46	9	16	117	*
19	204	69	50	175	69	61	18	14	63	14	16	160	土器片
20	(82)	68	11	(75)	58	44	13	8	68	13	9	56	*
21	86	(41)	19	80	(40)	28	7	5	29	7	3	60	*
22	85	(52)	12	65	49	38	6	7	35	5	3	55	*
23	109	56	29	95	36	35	7	4	42	9	6	67	土器片
24	105	58	11	96	43	46	17	7	45	12	9	77	*
25	(90)	62	34	(85)	53	35	10	7	32	11	6	45	*
26	(80)	(57)	9	(75)	(53)	29	9	8	34	9	4	61	*
27						31	11	11	27	21	9	60	やや斜交
28	(56)	56	23	(37)	44				33	8	7		直 交
29	80	64	13	76	57	36	9	7	34	11	6	51	やや斜交
30	95	64	10	88	56	30	10	8	37	22	11	61	*
31	82	48	27	62	36	29	11	10	28	8	8	54	平 行 墓縁、土器片
32	(89)	50	16	85	40				41	10	8		斜 交 小口無し
33	(185)	106	41	(180)	86								斜 交
34	347	113	53	330	93								*
35	170	(85)	22	128	(77)								平 行 石鏡1
36	(39)	55	26										やや斜交 墓縁、土器片
37	(139)	62	27	(127)	42								斜 交 墓縁、土器片
38	192	65	26	188	50								斜 交 墓縁、二方石組、土器片

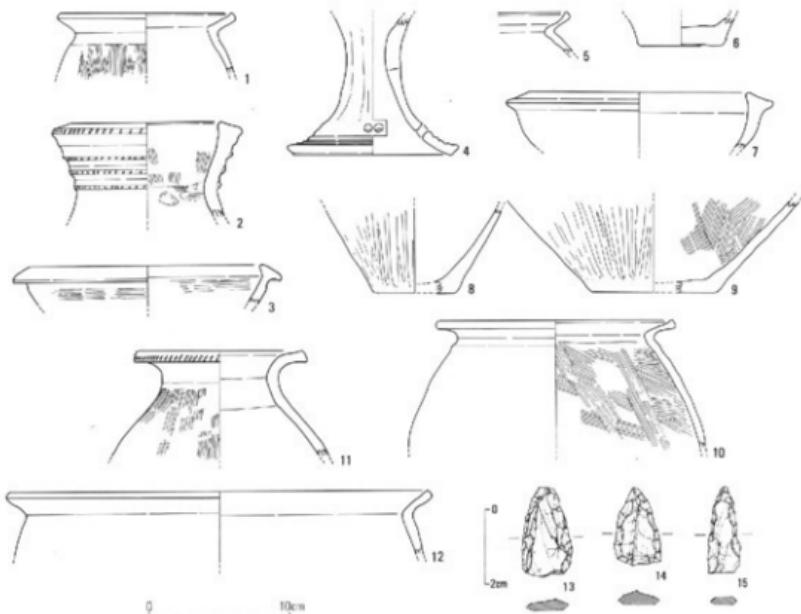
表1 土壙墓一覧表（1～4は上層、5～38は下層）

に土壤墓5は北小口側に1点、南小口側から3点出土し先の向きもまちまちである事（第33図 S G 5 参照）から、死者に供獻された可能性と戦死者が体内に石鎚を残したまま、葬られた可能性の両者が考えられよう。これら石鎚（13~15）はいずれもサヌカイト製で13は先端が折れている。また、墓壇上に供獻されたと考えられる土器片が16基の土壤墓から出土している。その内図示できたのは第40図である。

1は土壤墓7、2は同9、3は同12、4は同31、5~7は同33、8~10は同35、11~12はピット1（P1）からの出土遺物である。器種は壺・甕・高杯形土器で、2は壺の頸部で3条の突帯と端部に刻み目を施し、内面にはハケがみられる。甕では1~10のように口縁部は「く」の字に外反し、端部を上方へ少しつまみあげているものと、11の様にやや緩やか



第39図 土壙墓出土遺物

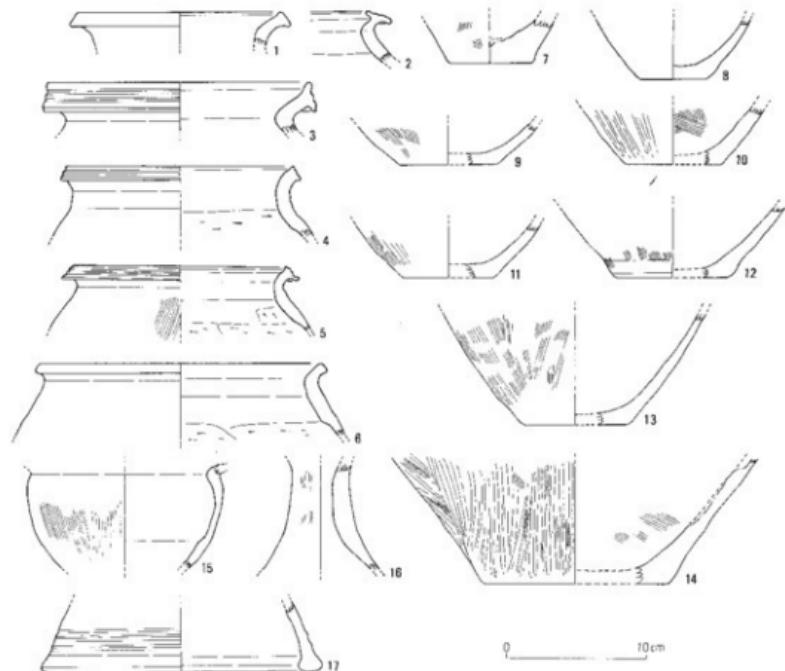


第40図 土壙墓出土遺物 (1~12…S=1:4、13~15…S=2:3)

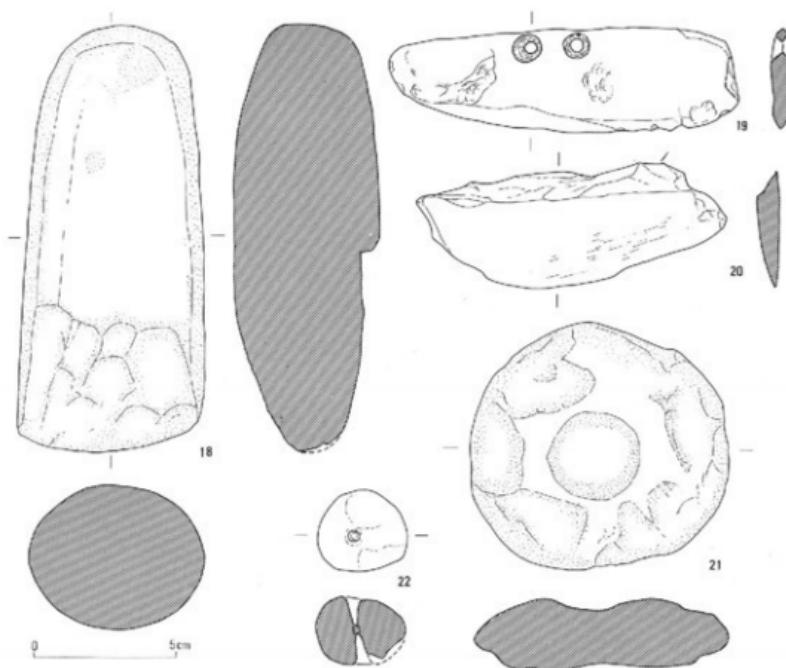
に外反させ端面に刻み目を施すものがあり、胸部の外面はハケで下半部分ではその上からヘラ磨きを施し、内面にはほぼ全面にハケを施している。3・7は椀状を呈する高杯の口縁端部は内・外面につまみ出し、4の脚部据部分には2個1単位の円孔が穿たれている。

3. 遺構に伴わない遺物（第41～43図）

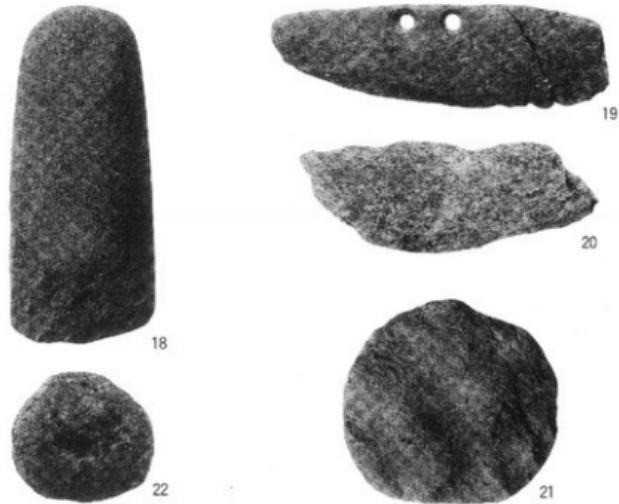
遺構に伴わない遺物として、盛土内などから弥生土器・石器が出土している。石器が出土する事から当初は上層遺構の下に、住居址などの別遺構の存在を考えていた。結局下層には住居などの生活遺構は発見されなかった。そのためこれら石器は、墓壇などに供獻されたもの的可能性が大きい。遺物の内図示したのは第41・42図である。1は壺、2～6は甕、7～14は壺ないしは甕の底部、15は鉢、16は高杯、17は器台形土器である。18は玢岩製の磨製石斧で刃部は一部欠損、19は磨製石庖丁、20は片岩製の石庖丁で円孔は見られないが、刃部にはかなりの使用痕が観察される。21は玢岩製の環状石斧の未製品、22は土製の丸玉で円孔が穿たれ、おそらく貫通しているものと推定され、紡錘車の可能性もある。



第41図 遺構に伴わない出土遺物(1) (S=1:4)



第42図 遺構に伴わない出土遺物(2) ($S=1:2$)



第43図 遺構に伴わない出土遺物(2)

IV まとめ

三毛ヶ池1号墓の時期並びに特徴について可能な限り述べてまとめとしたい。まず、上下2時期ある内の下層墓であるが、地山の削り出しや周溝による丘陵の切斷によって墓域を作りだした一種の区画墓である。その中に土壙墓を掘り込んでいる。この土壙墓についてはその構造面や配置などによって分類を試みた。これら土壙墓は互いに切り合う事がないので、何らかの埋葬規定が存在していたものと推測できる。まず、墳丘上の土壙墓群を見てみると、小口溝をもたない土壙墓34・35を除くとすべてほぼ南北方向(尾根線に対し直交)を向いている。また、大形と分類した土壙墓6・7、8・9、14-16などは2~3基で一つの単位を形成しているようである。そして、これら大形の間に小形が作られている。この中で、5・29・30のみやや主軸がずれているものの位置的にはうまくはまっている。この事から一般論的に考え戦いや疫病の流行などない限りこのような多数の死者が一度にでる事は考えられず、これら埋葬には少なくともある程度の時間幅が生じている事は確かである。ちなみに5など主軸の方向がずれる方が、切り合い関係から新しい事がわかっている(5の場合は出土した石鎚から戦死者の可能性が指摘できる)。となると、この主軸のずれは全体の墓域形成にはさほど関係ないものかもしれない。その場合、墳丘のはば中央に作られた大形の5~7の3棺を取り囲むように他の大形が2~3基単位で配され、その隙間に小形が配されると言った一つの埋葬規定を想定する事も可能である。しかし、大形の土壙墓間には規模、棺構造、副葬品などの面で優劣をつける程の差異はまだ生じていない。次に時期であるが、出土した土器の内第40図2は頭部に突帯をもつ壺で、津山市沿EII遺跡(註1)、アモウラ遺跡(註2)、紫保井遺跡(註3)、作東町高本遺跡(註4)などに見られ、美作地方の土器編年では、弥生時代中期の中頃に比定される。その他の器種例えば甕・高杯などもほぼ同時期と見なせる。ただ、この時期は高本遺跡、津山市西吉田遺跡(註5)の細分化からさらに2~3型式に分かれようであるが、厳密にいえばまだ編年は確立されてはいない。いずれにせよ美作地方におけるこの時期の墳墓は、アモウラ遺跡、竹ノ下遺跡(註6)などが知られているものの、竹ノ下遺跡については、溝などによる区画をもつ可能性もあるが、本遺跡の様に明確な区画墓は知られていない。

次に上層墓であるが、墳形は削平などのため明確でないが、梢円ないしは長方形の一辺に不整形の突出部が付設している。また、突出部のコーナー部分には貼り石が部分的に存在する。そのため、本米は平野部から見上げる事のできる斜面全面に貼り石が存在していたものと推測される。また、土壙墓数は削平のため全容は不明だが、下層墓程多くなく土壙墓1がほぼ中心に作られ、それを取り囲む様に土器棺などが配されている。この1からは副葬品は出土していない。土器棺から後期前半頃の墳墓である。この時期の類例としては、鏡野町竹田8号墓(註7)津山市下道山遺跡(註8)などが知られている。この時期になると周溝や貼り石、盛土などで区画を行った区画墓が出現し、区画をもたないものとの共存が知られている。しかし、墳形は上層墓の様に突出部を伴うもの、方形のもの、四隅突出風のものなど一律ではない。また、

ほとんど副葬品は無く、日常使われている土器が供獻される程度で、いわゆる祭祀用の装飾的な土器はまだ見られない。ただ上層墓の場合は突出部の斜面貼り石部分からかなりの土器が出土している事から、ここで祭祀的な行事が執り行われたと推測できる。また、この突出部分の盛土内に見つかった2列の石列は、埋葬施設ではなく、盛土の補強に使用された可能性を指摘した。これについては、この時期の類例がなくさらに検討が必要である（註9）。

以上、1号墓は弥生時代中期中頃と後期前半の2時期に作られた区画墓で、前者は美作地方の区画墓の初現と言える。両者の間にはかなりの時間幅があるため、この時間的流れの中で墳形の変化や土壙墓の数が激減している背景に何らかの社会的要因があった事が伺える。ただこれが何に起因するのかは、副葬品の面などからは推測はできない。下層墓において中央にある大形土壙墓3基を取り囲む形で他の土壙墓が配され、各土壙墓間には卓越化は見られない埋葬規定を考えたが、同様な考え方としてとらえられる調査例がある。やや時期が新しくなるが、後期後半の才ノ峪遺跡の調査例をもとに、美作地方弥生時代墓制のモデル化を行った報告がある。この中で、竹ノ下遺跡の事例から中心3棺並置を取り囲む様に他の配されるモデルを考え、これを元に下道山遺跡の場合はその中心部分のみが独立した別モデル、才ノ峪遺跡の場合は変異形態とし、この場合、中心が3棺・2棺並置などの場合があるため、前者を血縁組織を前提とした兄弟関係、後者を夫婦を中心とした近親者関係と位置付け、美作地方後期の墓制はこのモデルとモデルの変異形態で成り立っているとしている（註10）。下層墓は正にこのモデルにあてはまり、上層墓も変異形態の一種（中心1棺）とすれば広義にはこのモデルの範疇に含まれる。ただ埋葬された構成員の位置付けについてはさらに慎重を要しよう。この様な中心埋葬の出現、卓越化現象の中で、後期の後半以降はその背景には何らかの共通性をもちらがらも、地域ごとに独自の墓制を展開させていく、その後普遍的モニュメントとしての古墳を創出させていく。本遺跡はまさにこの卓越化現象前夜の墳墓と言えよう。今後の研究課題としては独自に展開していく美作地方の墓制の変遷をさらに細かな観点から分析し、他地域との比較・検討をおこなっていかねばならない。これについては改めて言及したい。

- （註1）中山後紀・行田裕美「沼遺跡EII」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8集』津山市教育委員会 1981
- （註2）1981～82年広域林業構造改善事業文化財発掘調査委員会が調査を実施。報告書未刊。
- （註3）1975年広域農業農地農道文化財発掘調査委員会が調査を実施。調査担当者の中山後紀氏に資料の提供を得た。
- （註4）井上弘・岡田博・山磨康平他「高木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』岡山県教育委員会 1975
- （註5）行田裕美「西吉田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』津山市教育委員会 1985
- （註6）中山後紀「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集』津山市教育委員会 1982
- （註7）今井彌・安川農史他「竹田墳墓群」鏡野町教育委員会 1984
- （註8）栗野克巳・岡本寛久他「下道山遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17』岡山県教育委員会 1977
- （註9）長野県森将軍塚古墳など古墳の盛土内に積まれた例はある。小笠原好彦氏に御教示を得た。矢島宏雄他「史跡森将軍塚古墳」更埴市教育委員会 1992
- （註10）中山後紀・湊智夫「才ノ峪遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集』津山市教育委員会 1985

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第48集

三毛ヶ池遺跡

平成5年3月31日発行

発 行 津山市教育委員会
岡山県津山市山北520

印 刷 株式会社 廣陽本社
岡山県津山市田町22
